

平成 22 年 5 月 1 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19520336
 研究課題名（和文） イベント間関係読み込みとイベント融合による英語二次述語構文と日本語複合動詞の研究
 研究課題名（英文） A study of English secondary predicate constructions and Japanese multiple-verb constructions based on the idea of forced interpretation of relations
 研究代表者
 加藤 鉦三（KATO KOZO）
 信州大学・全学教育機構・教授
 研究者番号：20169501

研究成果の概要（和文）：移動先二次述語，非使役二次述語，同時的二次述語などは，いわゆる結果構文と「2つのイベントが並列していること」で共通しており，2つめのイベントが『結果』を表すかどうかで違う分類にすることに大して意味はない。2つのイベントが並列しており，かつ両者の間に接続詞がない場合，両者の関係は，2つのイベントの間で【同時・継起・原因 結果】のいずれかが読み込まれる。この3つのうちどれが読み込まれるかで，構文の意味が決まる。

研究成果の概要（英文）：The resultative construction has two events in one clause. This is shared by other constructions with secondary predicates. If there are two events in a clause and if there is no conjunction between them, then the relation between them is chosen out of the following three options; <simultaneous>, <consecutive>, <cause-result>. This choice determines the “meaning” of a clause with two events.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：意味論

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：イベント間関係読み込み，結果構文，二次述語

1. 研究開始当初の背景

次は英語の二次述語を含む構文である。

(1) 使役的二次述語： John broke the glass to pieces. / John stabbed him to death.

(2) 移動先二次述語： John walked to the station. / It froze to the ground.

(3) 非使役二次述語： The car skidded to a stop.

(4) 同時的二次述語： They bowed him in. / They rang him out.

英語の結果構文(1)の扱いは、次の二つに大別される。

(i) 使役構文的扱い

[動詞の表す動作]と[結果事象]を、CAUSE 関数・玉突きモデルなどにより結びつける

(ii) 構文イディオムとしての扱い

(ii)については、当該構文の統語的・意味的特徴の記述が目的であり、構文の存在そのものの説明は意図していないように思われる。(i)については、構文の存在の説明をも視野に入れたものと評価できるが、なぜ使役関係なのかという問題に対しての本質的な解答にはなっていない。また結果構文の基盤を使役・玉突き関係に求めることにより、使役・玉突き関係ではないが二次述語的な意味特徴を持つ周辺構文の存在を見失うことになる。

(1),いわゆる結果構文は,このように,(2)-(4)とは別物として扱われていた。これらは、一つの節にイベントが二つ盛り込まれているという点で共通していることはもちろん気付かれていたが、これらを統括する構文があり,(1)はそのサブタイプであるという方向での考察は主流ではなく、また結果構文で「結果」の意味がどこからくるものなのかという問題意識をもった研究はなかった。

2. 研究の目的

(1) 着想に至った経緯

・as 節の意味解釈はイベント間の関係読み込み

加藤と花崎の一連の研究で、as 節の<同時><理由><譲歩>等の解釈は、主節イベントと as 節イベントの意味関係の読み込みによって行われるのであり、as 自体に同時・原因等の意味があるわけではないこと、その解釈は and・テで結ばれる2つのイベント間でのものと同じであることを明らかにした。

[時] 通りを歩いていて、私は友人に会った。

[理由] 病気が長引いて、彼は家にいた。

[譲歩] あなたの言い分は認めるとして、(それでも)あなたはまちがっていると思う。

[付帯状況] 彼らに別れを告げて、その家を出た。

本研究は、この2つのイベント間の意味関係読み込みを、結果構文及びその周辺構文の意味記述に応用しようとするものである。

(2) 結果構文での動詞と二次述語の関係

本研究の第一段階での目的は次のものである。

英語の結果構文における動詞と二次述語の関係に対し、as 節と同様の「イベント間の意味関係の読み込み」という新しい見方を導入する

結果構文において、「～になる」という意味が付加される理由を、「イベント融合」で

説明する可能性を追求する

と がある程度見込みがたった段階で、次に進む。

(3) 周辺の二次述語構文に応用する

のイベント間の読み込みを周辺の二次述語構文に応用する

これら周辺の構文での意味付加(上記(6))を、 のイベント融合によって説明する

(4) 日英語の違いを「イベント融合」のレベルの違いに求める

日本語では次の事実がある。この事実を、のイベント融合によって説明する

(i)日本語には「玉突き型」である英語の結果構文はない

(ii)その代わりに動詞同士の複合語が発達している

(5) 特色・独創的な点及び予想される結果と意義

予想される結果とその波及効果は次の通りである。

英語の結果構文の特徴を説明するため、イベント間の関係読み込みとイベント融合という二つの道具立てを提案する。

その道具立ては次の理論的波及効果を持つことを示す。

・従来の分析では結果構文との関係がはっきりしなかった周辺の二次述語構文の特徴を十分に記述する

・日本語の複合動詞に対し、語彙レベルでのイベント融合という新しい観点からアプローチする

の結果と の波及効果は次の意義を持つものである。

日本語の複合動詞構文との平行性と異動を包括的に扱うこと。

イベント融合によるイベント間意味関係読み込みにより、従来の CAUSE 関数設定に対して説明を与えること。

二次述語構文に特徴的に見られる意味付加、すなわち意味補正に関する本格的な研究となること。

意味補正の理論的基盤となる、動詞の動作の結果・目的の含意に関する研究を行うことになること。

3. 研究の方法

(1) イベント間の関係読み込みならびにイベント融合の結果構文への適用

二次述語をサブイベントと考える

二次述語構文では、動詞のイベントと二次述語のサブイベントが融合されていると考える

イベントとサブイベントとの意味関係は、as や and/テと同じく、イベント間の関

係読み込みによって得られる

しかしサブイベントは動詞を持たない二次述語であるため、節を導く as や and/テに比べて意味内容に乏しい

そのため、結果構文では読み込みが容易な【因果関係】か【継起】に限られる

【因果関係】: 本来的結果構文、一部の派生的結果構文

【継起】: 一部の派生的結果構文

サブイベントは形容詞・前置詞・副詞とその「主語」しかない。しかし動詞のイベントとの融合により読み込まれる意味関係【因果関係】【継起】を動詞のイベントと結ぶにふさわしい程度に意味補正が行われる

([AP・PP] [AP・PP になる])

(2) イベント間の関係読み込みならびにイベント融合の(2) - (4)の二次述語構文への適用

サブイベントは動詞を持たない二次述語であるため、節を導く as や and/テに比べて意味内容に乏しい

そのため、(1)~(4)の構文では読み込みが容易な【因果関係】【継起】【同時】に限られる

【因果関係】: (1) 本来的結果構文、一部の派生的結果構文

【継起】: (1) 一部の派生的結果構文、(2) 移動先二次述語、(3) 非使役二次述語

【同時】: (4) 同時的二次述語

結果構文と同様の仕方でサブイベントの意味補正を研究する

例) bow [a person in]

サブイベント bow のイベントと【同時】関係を結ぶ。しかしサブイベントは a person と in (人が中) しかない。「お辞儀をする」と

【同時】関係を結ぶ「人が中」に意味補正が行われる。お辞儀という動作の目的は、「人を中に招き入れる」ことであることが可能。この「人を中に招き入れる」はサブイベント「人が中」と整合し、補正が認可される。この場合、補正は動作の目的をキーにして行われる。

(3) 英語の二次述語構文と日本語との異同の イベント融合による説明

(1)~(4)の構文では、動詞のイベントと二次述語のサブイベントが融合されていると考える

そのイベント融合は、膠着語の特徴から日本語では語彙レベルでしか起こらないと仮定する

よってこれら4つの構文に対応する日本語表現は、「刺し+殺す」のような複合動詞でしか実現されない。しかしイベント間読み込みとそれに伴う意味補正はある程度共通である。

4. 研究成果

・結果構文の事象構造は次のようになっている

S V O R

SV(0) : 動詞事象

John hammered the metal flat

John sang himself hoarse

OR: 共起事象

John hammered the metal flat

John sang himself hoarse

・動詞事象と共起事象との関係は次のように解釈される

(1) 両事象は並列関係である

(2) 両事象の関係は事象間関係読み込みによって解釈される

・ただし、共起事象は動詞を含まず、また disjunct でもないため、最も弱い関係である<時> (= 同時、または継起) しか選択肢がない

A & B<時>: A が成立して B が成立する

・A & B<時>の CAUSE-BECOME 効果

(イ) 動詞事象と共起事象は、一つの節の中で並存する & 一つの節では話は一貫していなければならない

(ロ) 動詞事象と共起事象の関係は<同時>または<継起>である

(イ)「A と B は一貫している」

+

(ロ)「A が成立して B が成立する」

「A が成立したことにより B が成立する」

・結果構文およびその周辺構文では、その統語パターンは、その文で言っている内容 (= 実際にやっていること) を表す標準的な現実の文の統語パターン (標的パターン) を踏襲する

[結果構文] he sang himself hoarse

Obj Adj

= [標的パターン] he made himself hoarse (by singing)

Obj Adj

これは次のように言い換えることができる。「動詞は、その動詞の典型的な統語パターンにはない要素を率いることができる」

その際の条件は次の通り;

(イ) 動詞とその要素 (i.e., 動詞事象と共起事象) との間にある関係 R を読み込むことができるような意味内容を両者が持っており、

(ロ) その R を固有の意味として持つ現実の文 (i.e., 標的パターン) が存在し、

(ハ) 共起事象の文法範疇配列が、標的パタンのものと一致している

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 7件)

加藤 鉦三・黒田航, 並列構造の不正な統語解析結果を統計的に検出する, 言語処理学会第16回年次大会(NLP2010)発表論文集, 16巻, 888-891, 2010, 査読無

花崎美紀, 「事態間読み込み」という観点からみる As の意味論, 人文科学論集(文化コミュニケーション学科編), 44巻, 65-75, 2010, 査読有

黒田航・加藤 鉦三, 今の機械翻訳に利用者が望めること, 望めないこと, 日本語学 28巻-12(10月号), 30-43, 2009, 査読有

花崎一夫, 花崎美紀, 日英語の語レベルにおける相同性をめぐって, 信州大学人文社会科学研究所, 3巻, 56-70, 2010, 査読有

加藤 鉦三, if 節を伴わない仮定法の翻訳手法, 言語処理学会第15回年次大会(NLP2009)発表論文集, 15巻, 650-653, 2009, 査読無

花崎一夫・加藤 鉦三, 前置詞の棲み分け in と on を中心にして, 中部英文学, 29巻, 233-242, 2009, 査読有

加藤 鉦三, 言語学的視点からの和英翻訳エンジンの評価と改良のための提案, 言語処理学会第14回年次大会発表論文集, 14巻, 309-312, 2008, 査読無

[学会発表](計 6件)

加藤 鉦三, 結果としての結果構文, 日本英文学会中部支部大会60回大会, 2008.10.18, 松本

花崎一夫・花崎美紀, The Semantics of Till / Until / To & On / Upon / In, ELSJ International Spring Forum, 2008.4.27, 東京

加藤 鉦三, Why Do Prepositions Look Polysemous?, ELSJ International Spring Forum, 2008.4.27, 東京

加藤 鉦三, 名詞の語彙情報として何を設定すべきか 多義的(?)な動詞の用法記述から, 日本英語学会, 2007.11.10, 名古屋

加藤 鉦三, PDNモデルによる前置詞byの用法記述, 日本英文学会中部支部大会, 2007.10.6, 名古屋

加藤 鉦三・黒田航, 「Nを始める」では何を始めるのか, Morphology & Lexicon Forum, 2007.6.30, 神戸

[図書](計 1件)

足立公也・都築雅子(編著), 勁草書房, 学校文法の語らなかつた英語構文, 2010, pp50-88, 123-144

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加藤 鉦三 (KATO KOZO)
信州大学・全学教育機構・教授
研究者番号: 20169501

(2) 研究分担者

花崎 美紀 (HANAZAKI MIKI)
信州大学・人文学部・准教授
研究者番号: 80345727

都築 雅子 (TSUZUKI MASAKO)
中京大学・国際教養学部・教授
研究者番号: 00227448

